甲南高校新聞

発　行
鹿児島県立甲南高等学校
鹿児島市上之園町23の１
TEL（099）254-0175
編　集
甲南高校生徒会広報委員会
印刷所
㈱朝日印刷

＜主な記事＞
2面　部活動生大活躍　ＫＩ
3面　甲南高校のあゆみ
4面　名物生徒
　　鳶目兎耳
　　部活動潜入記

涼風が吹き抜ける高みから甲南高校を見守り続けてきたドームが西日の強い日差しを押し返している。歴代甲南生の万感の想いが深く刻み込まれた学舎は五年余りをかけた大改修で創建当時の輝きだ。その中でも甲南高校を象徴するドームのシルエットは格別の風格がある。

創立百十周年記念体育祭の感動が残るグラウンドに、三年生三百余人が再び結集し、吹奏楽部の奏でる軽快なリズムに合わせて、歓喜の声を上げ砂煙を巻き上げながら「甲南ジャンプ」を繰り返している。反響がグラウンドを囲む学舎に溶け込んでいく。余韻を惜しみ、収まりきらない情熱を仲間とともに学舎に刻み込もうとしているのか。その姿を遠巻きに後輩たちは羨ましそうに眺めている。保護者・同窓会の方々も各遠き日々を想起されているかのようだ。これが既視感（デジャビュ）というものなのだろうか。甲南では生徒たちがひとかたまりになって歓喜する光景をしばしば目にする。

百十年を日数に換算すると四万日余、時数では百万時間ほど、分数では…もう止めておこう…。言うまでもなく膨大な時間だ。今振り返ると、わずか高校三年間ですら容易に表現できない。誰しも言い尽くせないのではないか。高校の三年間は、その後のどの年代の三年間と比較しても圧倒的に濃密で凝縮した特別な時間であり、ひとそれぞれによって、人生の彩りが大きく変わると言っても過言ではないだろう。

母校創立110周年、誠におめでとうございます。同窓生を代表して心からお祝い申し上げます。同窓生にとっての誇りである鹿児島県立甲南高等学校が、110周年を一つのステップとして、さらに更に発展されることを大いに期待したいと思います。

さて、私たちは10年前の創立百周年時、母校に同窓会館を贈ろうと、募金目標を2億円とする募金に取り組み、会員全員の力で達成しました。その会館が「二甲記念館」です。

2階に通じる通路には、多額の寄付をいただいた皆さんのお名前が記載されています。

そして110周年の今年、将来世界で、また日本で活躍する人材を育成するために、在校生を海外に送ろうという「在校生海外派遣事業」に取り組んでいます。まだ募金目標には達成していませんが、鹿児島（本部）で同窓生による運営が始まったのは昭和43年です。その後、先輩方の並々ならぬご努力があり、活動は年々活発に行われるようになり、県内の同窓会の先頭に立って色々なことにチャレンジされそうです。総会の新聞広告の掲載も、総会を城山観光ホテルで開催するようになったのも甲南高校同窓会が初めてです。

さらに創立百周年終了後は、私たちの先輩二中同窓会、また二高女同窓会とも合併し、二中・二高女・甲南高校の卒業生が一つになり、以後は「甲南高校同窓会」として活動しています。

こうした活動の中から、同窓生同士の懇親を深めるだけでなく、母校発展のために、在校生の勉強や、各部活動、甲南塾への奨学資金設立後、多くの同窓生が母校・在校生の活躍を願う気持ちの発露として応援してきた歴史がありますが、この想い、寄付行動は、歴史が繰り返されるように、先輩方の想いを引き継ぎ、私たちが続けていかなくてはなりません。

甲南高校同窓会も母校が、これからも同窓生に協力していただき、平成36年まで継続したいと皆で取り組んでいるところです。

さて、同窓会の歴史ですが、鹿児島（本部）で同窓生による運営が始まったのは昭和43年です。その後、先輩方の並々ならぬご努力があり、活動は年々活発に行われるようになり、県内の同窓会の先頭に立って色々なことにチャレンジされそうです。総会の新聞広告の掲載も、総会を城山観光ホテルで開催するようになったのも甲南高校同窓会が初めてです。

さらに創立百周年終了後は、私たちの先輩二中同窓会、また二高女同窓会とも合併し、二中・二高女・甲南高校の卒業生が一つになり、以後は「甲南高校同窓会」として活動しています。

こうした活動の中から、同窓生同士の懇親を深めるだけでなく、母校発展のために、在校生の勉強や、各部活動、甲南塾への奨学資金設立後、多くの同窓生が母校・在校生の活躍を願う気持ちの発露として応援してきた歴史がありますが、この想い、寄付行動は、歴史が繰り返されるように、先輩方の想いを引き継ぎ、私たちが続けていかなくてはなりません。

甲南高校同窓会も母校が、これからも同窓生に協力していただき、平成36年まで継続したいと皆で取り組んでいるところです。

君が、あなたが、主役です。

甲南高等学校同窓会　会長　石田新憲

論説

「甲南物語」は終わらない…

never ending story

校長　原之園　哉

「甲南物語」は三年間では決して終わらない。二甲記念館前で凛と佇むヒメシャラの根元の小さなプレートが静かに、そして強烈に語りかけている。

「わっぜ甲南。いっど甲南。一生甲南…疑う余地なく、同窓会の思いは懐深く温かく、そのきずなは羨望されるほどに深遠だ。

「甲南物語」は終わらない…、never ending story だ。否、甲南に幸いにも関わることができた、あなたは、さらにどっぷりと甲南に全身全霊を沈め、自分自身のために、そしていつか現れるに違いない、かけがえのない未来の読者のために、明日に生きるために、愉快な愉快な「甲南物語」を紡ぎ続けなければならない。

「人のすべての行動には目的がある」という。人は目的達成のために何をすべきかを考える自由と責務があるから、自らの歴史を築きながら明日に向かって生きていくことができるのではないか。甲南には伝統あるユニーク な学校行事がたくさんある。それぞれにしかるべき目的が設定されているが、生徒たちは自分なりのストーリーを創り上げようと甲南での時間を仲間とともに全力疾走している。

生徒一人ひとりがそれぞれの「甲南物語」の主人公であり、話し手であり読み手だ。そしていつの日にか、かけがえのない読者をも得ることだろう。

「甲南物語」は決して終わらない。二甲記念館前で凛と佇むヒメシャラの根元の小さなプレートが静かに、そして強烈に語りかけている。

「わっぜ甲南。いっど甲南。一生甲南…疑う余地なく、同窓会の思いは懐深く温かく、そのきずなは羨望されるほどに深遠だ。

「甲南物語」は終わらない…、never ending story だ。否、甲南に幸いにも関わることができた、あなたは、さらにどっぷりと甲南に全身全霊を沈め、自分自身のために、そしていつか現れるに違いない、かけがえのない未来の読者のために、明日に生きるために、愉快な愉快な「甲南物語」を紡ぎ続けなければならない。

とともに発展を続けたいと思っていますが、そのためには皆さんに、同窓会の将来は自分たちで担うのだという強い想いで、甲南高校・在校生を応援する主役になっていただきたいのです。

現在同窓会の組織は、本部である鹿児島をはじめ、東京・大阪・福岡など各地区に支部があります。卒業後は積極的に本部・支部の総会に出席して、先輩方との交流を深めるとともに、在校生時代を思い出し、年に一度、気持ちの中だけでも甲南ジャンプで弾けてみてはいかがでしょう。

鹿児島読売テレビのアナウンサーとして活躍され、現在はフリーアナウンサーの傍ら、講演活動や朗読家としても活動されている岡本安代さん。北京五輪代表で銅メダルを獲得し、現在はテレビなどでも活躍されている宮下純一氏。

挙げればきりがないが、今回は一一〇周年記念号ということで、広報委員があるOGの方にお話をうかがってきました！

今回、取材に協力してくださったのは、現在、鹿児島テレビでお仕事をされている塚田 舞先輩です。

塚田さんは今、毎週月曜から金曜、16時から16時50分までのニュース情報エンターテインメント番組「かごニュー」でキャスター兼リポーターを務めていらっしゃいます。

番組では興味ある話題を探して取材をし、その事実や実際に感じたことなどを番組の中で伝えることが主な仕事内容です。

一一〇周年を迎えた甲南高校の卒業生の中には、日本中でその名を知らない人はいない、と言えるほどの有名な方もたくさんいらっしゃる。

一昨年、ノーベル物理学賞を受賞された赤﨑勇先生（昨年のこの新聞で特集しました）。

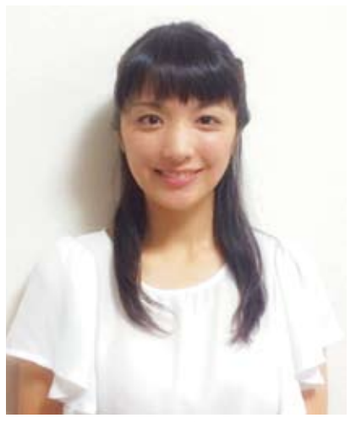
東京国際音楽コンクール、ブザンソン国際指揮者コンクールでいずれも優勝し、現在、世界的な指揮者として活躍されている下野竜也氏。

バラエティー番組や、ニュース・情報番組のメインパーソナリティーを務めるお笑いコンビ「ホンジャマカ」の恵俊彰氏。

『LIAR GAME』『ソムリエ』『ONE OUTS』などの代表作を持つ漫画家、甲斐谷忍氏。

甲南高校110周年

こんな先輩がいらっしゃいます



ＯＧ塚田舞さん

甲南高校の頃の思い出を聞いてみると、「甲鶴戦の閉会式後に鶴丸・甲南全員で跳んだり、体育祭終了後に3年生全員で跳んだりみんなと一体感が出る甲南ジャンプが大好きでした。好きすぎることもある。しかし、自分の仲間を信頼してバトンを繋いだ日本選手の絆、繋がりが他の国の選手のチームワークをはるかに凌いでいたから、四×一〇〇m史上初の銀メダル獲得という快挙につながったのだと私は思う。

私たちは、一人一人が力を合わせ信頼し合うことで、一人では成し得ないことを成し遂げることができる。しかし、信頼関係を築くことは簡単なことではない。個人が繋がることの大切さを理解し、結びつきを強めていかなければならない。例えば二人三脚や百足競走を考えてみると良い。お互いの足を繋げ、力を合わせて前へ走る。このとき、繋がっている人が相手のことを思いやる気持ちでもある。単に物理的に接続しているだけの状態は決して「繋がる」ということではない。

私はこの甲南高校でも強い繋がりを見つけることができた。それは私たちと甲南高校を卒業された先輩方との絆である。今年で一一〇周年という節目を迎えている甲南高校だが、これほどまでに長い歴史を積み重ねることができたのは、愛校心あふれる先輩方が私たちに歴史とともに伝統を継承してきてくださったからだ。そして、私たちはその歴史と伝統を未来の甲南生を繋いでいく責任がある。

一一〇回目のバトンパスがしっかり行われたことに対するお祝いが今日の記念式典である。記念式典は十年に一度しか行なわれないが、今年のようにバトンがしっかり受け渡されていることを多くの人に参加して見てもらいながら、そしてまた来年からしばらくは、静かに、しかし確実に力強く甲南高校というバトンは受け渡されていくことだろう。

学校という場を通じた数えきれない人と人との繋がりについて、改めて思いを寄せてみたい。

三〇〇〇。この数字はメジャーリーガーのイチローが、今年の八月に樹立したメジャーリーグ通算の安打数だ。これまでに通算三〇〇〇本安打を達成してきたのは、イチローを含めわずか三〇人であり、イチローはそのなかでも二番目の年長者ということであるから驚きだ。なぜイチローはこんなにも長年、世界の舞台で活躍することができるのだろうか。それはやはり抜かりのない準備に他ならないだろう。準備の天才とも呼べるイチローは「準備」に関してこう述べている。「準備という のは、いいわけの材料となり得るものを排除していく、そのために考え得るすべてのことをこなしていく。しっかりと準備もしていないのに、目標を語る資格はない。」

一方、今年の日本野球も熱かった。ペナントレースがセ・パ両リーグ激しい順位争いの中、セ・リーグでは広島が二十七年ぶりに優勝。パ・リーグでは三連覇のかかったソフトバンクが日本最速を更新した大谷選手を擁する日本ハムが優勝した。どちらの結果も大方の予想とは反したものだった。二つのチームが優勝できた原動力は何なのか。気になって調べてみると、互いにある共通点があり、その共通点が他チームと比べてずば抜けていたように思う。それは「若い力」があること。両チームの平均年齢をみると、他チームと比べて若い。そのため、勢いにのるとその若さで一気に突き進んでくれる。広島はもちろん、シーズン序盤は大差をつけられ二位だった日本ハムが、逆転勝利を収められたのは、若さあふれる勢いがあったからではないだろうか。

私たち高校生には「若い力」がある。甲南高校は、今年創立一一〇周年を迎え、勢いがある。これから私たちが、そして甲南高校が、歩む未来に向け抜かりない「準備」をし、若い力を以て突き進めば何事をも成し得る。そんな気がする。

繋ぐということ

二年前　田拓利

「繋がる」という言葉から、どのようなことが頭に浮かぶだろうか。私は特に人と人との繋がりを挙げたい。最近では熊本地震があったが、そこにはお互いに支えあいながら避難所で生活している人々の姿があった。

私たちは一人では生きていくことができない。食べるものや身につけているものは多くの人の手がかかっている。熊本地震の時に被災者に届けられた支援物資や寄付も、多くの人の協力によらなければ被災者の手元にまで届かない。人々が互いに力を合わせることで一人ではできない大きなことを成し遂げられるのだ。

人と人との繋がりは、心と心の繋がりでもある。私は部活動で野球をしているが、心と心の繋がりを強く感じる瞬間がある。それはチーム全員が一つの目標に向かって行動しているときである。チームメイト同士の心が互いに通じ合ったとき、一人一人の力の総和よりも大きな力を発揮することができるのだ。

その例として、今年の八月二十一日まで行なわれた甲子園で、チームの団結力で勝利を掴み取ったチームがあった。それは愛知県代表の東邦高校である。東邦高校は初戦に勝ち、次の試合で東北の強豪校、八戸学院光星高校と対戦した。東邦高校は四点ビハインドの九回裏に五点をもぎ取る奇跡の大逆転をして見事に勝利を収めた。

私は東邦高校が大逆転できたのにはいくつかの理由があると思うが、その中でも一つ挙げるとすれば、ベンチの選手たちの雰囲気である。私がテレビで見て驚いたことは、あと一つアウトを取られたら試合終了、チームメイトと野球をすることができなくなるという状況で、下を向いている選手は誰一人おらず、選手全員が笑顔であったことだ。もし私があの場にいて同じ状況に立たされたらと思うと、笑っていられるか分からない。東邦高校の選手は一人一人に力を出すことができたのだろう。支えてくれる人、応援してくれる

KI（Konan Innovation）プロジェクト

マスターピース（Masterpiece）

甲南高校の総合的な学習の時間の「KI」、「W－KI」は、自ら課題を見つけ調査、研究、考察していくことで、問題解決へ向け物事に主体的、創造的に取り組む姿勢を身に付けることを目的としている。三年生は、その集大成としてマスターピース（課題研究のまとめ）を作り上げた。

W－KIではこのマスターピースを英語で作成、イギリスや他県で発表する取り組みが行われ、研究の成果を世界中の人々に伝えることができるようになった。

今年の第三学年のマスターピースでは、環境・観光・食・ビジネスに分かれそれぞれの視点から人口問題という1つのテーマについて研究が行われた。マスターピースの発表では、発表者それぞれのユニークな視点から問題解決に向けての提言がされており、聴者が興味・関心を抱くことのできる、素晴らしい発表が展開された。

今回は、KIからは三年四組の山口佳那子さん、W－KIからは三年一組の末川遥奈さんが最優秀賞となり、学年代表として文化祭で発表した。

まず、山口さんは、「桜島の噴火と人口移動」というテーマで研究を進めた。

山口さんは、桜島では大規模噴火の度に人口が減っていることや、桜島の住民の防災意識が高いのに、対岸の鹿児島市街の住民はその意識が低いことを挙げた。

さらに山口さんは、現在の噴火対策に批判的に向き合い、新たに「県内一斉防災の日」を設定することを提案した。もしもの時のために、より多くの県民の理解・協力を得る必要があるのだと訴えた。

次に、末川さんは、「Soo good!」というテーマのマスターピースを、英語を使って発表した。「Soo」とは、曽於市のことである。

末川さんは、曽於市では少子高齢化が急速に進んでおり、小・中学校が廃校となって、その校舎の維持に多大な費用がかかること、要介護者の増加で、老人ホームなど福祉施設の需要が拡大していることが課題であるとした。

そこで、これらの課題を解決するため、末川さんは、廃校の校舎を福祉施設として再利用することを提案した。

設定されたテーマに沿った研究の発表は今回が初めてだったが、「世界へ羽ばたくグローバルリーダー」への大きな可能性が感じられた。

今後に乞う御期待。

W－KI（Wazzel Konan Innovation）プロジェクト

先輩に学ぶ進路セミナー

7月の下旬、一年生はW－KIの活動の一環で「先輩に学ぶ進路セミナー」を行った。

本校を卒業され社会でご活躍されている先輩方の職場に、グループごとにわかれて訪問し、お話を伺った。

今回は、バルーンアートの業界で働く先輩を紹介する。

甲突川近くの公園の向かいにある「ビタミンバルーン」は、名前の通りバルーンを扱っている会社で、誕生日や発表会などでの贈りものや、ショッピングセンター、結婚式場などの飾りつけを行っている。

今回訪ねたのは、代表の下野恵吾さん。とても気さくな方で、リラックスしてお話を伺うことができた。

下野さんがバルーンアートに興味を持たれたのは、21才の頃だそうだ。

10年前からこの仕事を始めたが、大きなきっかけは特には無かったらしい。

最初は仕事の楽しさがよく分からなかったが、最近はとても楽しみながら仕事をされているという。

次に、いくつかの質問をしてみた。

●バルーンの仕事をする中で、大変だったことは何ですか？

↓この仕事を始めた10年前は、バルーンを人に贈るという習慣がなかった。

そのため、まずバルーンを認知してもらうことが大変だった。

●バルーンの仕事のやりがいは何ですか？

↓届けた子供たちの笑顔をみることが何よりの喜び。

●高校生へのアドバイスをお願いします。

↓国語をしっかり学ぶべき。英語をうまく話すことができなくても、難しい数学の問題が解けなくても、日常生活で困ることは少ないが、日本語を上手に使えないのは、とても恥をかくことだ。

大人になっていくにつれて、国語力はさらに大切になっていくので、しっかり磨いてほしい。

いろいろ学んだ修学旅行

六月十四日から、私たち二年生が楽しみにしていた三泊四日の修学旅行が始まった。出発地点である鹿児島空港ではみんなの顔が期待に満ちていて、うきうきとしていた。また、飛行機の中ではそれぞれが友達と、これからの修学旅行について話していて、話の輪が広がっていた。いよいよ東京に到着。私たちが一番最初に向かったのは、東京スカイツリーである。東京スカイツリーは、東京の昔の国名「武蔵」にちなんで六三四メートルという日本一の高さの塔である。一部床が透明なガラス張りの所があったが、下を見るだけで足がすくんだ。東京スカイツリーを楽しんだ後、私たちは、東京博物館・東京科学館・上野動物園の三つのうちから選択し、それぞれの場所へ向かった。そこは鹿児島とは比べものにならないくらい建物が大きく、歩くのにも一苦労だった。みんなそこではそれぞれ思いのまま楽しめただろう。その後、ディズニーのアンバサダーホテルに行き、テーブルマナーを学んだ。テーブルマナーでは私たちにとってはなじみのない食事のマナーをしっかりと学ぶことができた。その後、ミッキーやミニーなどのディズニーキャラクターが登場するサプライズと撮影会があり、最高なしめくくりで一日目は幕をとじた。

二日目は、朝早くからそれぞれ事前に選択した先輩方の職場に行き、そこで職場の説明や職場に対する思いについて聞いた。この経験から改めて甲南の先輩たちがすばらしいということを実感することができた。そして、いよいよ自由研修。雨の中、人の波にもまれながらもそれぞれ渋谷や原宿などの大都市での食事やショッピングなどを満喫した。そして夕方からは劇団四季劇場「夏」で劇団四季の代表作とも言える「ライオンキング」を鑑賞した。ダイナミックな演技や感動するストーリー性をもっており、みんなの目が、舞台にくぎづけになっていた。ホテルへ向かうバスの中では職場研修や自主研修、「ライオンキング」などの感想などをそれぞれ述べており、余韻にひたっていた。こうして修学旅行の二日目を終えた。

三日目は、大学研修と

ディズニーシー。三日目とあって多少の疲れが出るかと思いきや、全くそんなことはなかった。東京大学、東京工業大学、早稲田大学、お茶の水女子大学などに分かれ先輩方の案内のもと見学させていただいた。大学内では様々な国籍の方々や授業風景、設備と初めて見るようなものも多く、学びの探究心への刺激になった。午後、みんなが待ちに待っていたディズニーシーに到着。バスから降りると多くの生徒が駆け出した。天気は曇ではあったがそれを吹き飛ばす盛り上がりようだった。仲間と乗るアトラクションだけでなく、美しい景色、食べ物まですべてを楽しんだ。昼すぎから夜遅くまでの間を過ごしたが、はしゃぎ、笑った楽しすぎる時間はあっという間のように感じた。帰りのバスでも興奮は冷めることはなかった。夢の国でのひとときを忘れることはない。

最終日は浅草観光。修中で雷門は見ることができなかったが、ある意味ラッキーのように思えた。古き良き下町の情緒を漂わせる浅草寺や商店街では大いに楽しむことができた。花やしきでのアトラクションも思い出に残っている。空港へ向かう道のりでは、三泊四日を過ごした東京が名残り惜しく思われ、たくさんの思い出が蘇ってきた。こうして、私たちは修学旅行を終えた。修学旅行は高校生活において最大のイベントといえるが、私たちの修学旅行は最高のものになったと思う。楽しさはもちろんだが、大人数で行動する際のマナー、一般の人への配慮などこれから社会で生活するうえで不可欠になるものを学ぶ良い機会にもなった。そして二年全体の団結力も強くなったと思う。その力で今後も学年全体で日々邁進していきたい。最後にこのような修学旅行を作り上げてくださった先生方、その他の関係者の方々、自分たちの両親へ感謝の気持ちを伝えたいと思う。本当にありがとうございました。

注目選手へインタビュー
～全国大会を終えて～

今回は甲南高校が誇る名物生徒二人にスポットライトを当ててみました。

まずは、折田歩くんにインタビューしました。

Q1. 陸上競技を始めたきっかけ、また、短距離を始めたきっかけは？

A. 小学校3年生のときに母に勧められ、陸上競技を始めました。

短距離をはじめたきっかけは特にないが、中学生のとき、かっこよくてモテそうだからハードルを始めました。

結果、モテませんでした。

Q2. 陸上競技をやっていてつらかったことはありますか？

A. 陸上は好きでやっているので、つらいと思ったことはないです。

きついメニューはもちろんありますが、それはそれで楽しいです。

Q3. 目標としている選手はいますか？

A. 特にいないが、みんなから応援されるような選手になりたいです。

Q4. 文武両道を成し遂げるためにどのような意識をもっていますか？

A. 自分が今したいことと、すべきことの区別をはっきりするよう心がけています。

Q5. 今後の目標を教えてください。

A. まずは、日本のトップに立つことです。

その後は、日本代表として世界で戦いたいです。

また、海外遠征をしながら、世界遺産巡りをしたいと思っています。

最後に、甲南高校の生徒たちへのメッセージをお願いします。

勉強と部活の両立も、もちろん大事ですが、それ以上に大事なことはたくさんあると思います。〝人〟として成長していくべきだと思います。

美術部に所属する徳永葵さんにインタビューしました。

Q1. いつから本格的に絵を描き始めたか？

A. 絵を習い始めたのは小学校一年生のときです。きっかけは、幼稚園の頃から絵を描くことが好きだった私に母が絵画教室へ通うのを勧めてくれたことです。それから今までずっと絵を習っていて、中学、高校も美術部に入りました。

Q2. 今回賞をとった感想は？

A. 2年生の時の高美展が全国大会へ行ける最後のチャンスでした。どうしても全国の作品を直接見たかったので、準大賞をいただき、全国へ行けると決まった時はとてもうれしかったです。しかし、作品の評価を気にして本当に自分が描きたいものを完全に表現しきれなかったのではないかという思いがあるので、今後の作品に生かしていこうと決意しました。

Q3. 絵の発想はどこから来るのか？

A. 伝えたいテーマを決めて、どんどんイメージを膨らませて作品の構想を練ることが多いです。他には、日頃の生活で、ふと「これを描きたいなあ」と思うことから作品を考えていくこともあります。

Q4. ずばり絵画の魅力は？

A. 絵画の魅力は「自由さ」にあると思います。何を描いてもいいし、どう描いてもいいし、作品を見た人の感想や解釈が何であろうと自由です。その自由さゆえに苦しいときもありますが、楽しくもあります。私は、作品を見てくれた人が、日常生活を送る中で、ふとしたときにちらっと頭の中をよぎってくれるような作品を作っていきたいと思います。

県大会ベスト16・市大会3位以上

【硬式テニス部（男子）】
●鹿児島市高等学校テニス競技大会　団体Bパート　第3位
●第34回鹿児島県サマージュニアテニス大会　男子　1年生の部　ベスト8　下竹　健斗

【卓球部】
●第69回鹿児島県高等学校卓球競技大会　男子団体　ベスト16
男子ダブルス　ベスト16　隈本惇心・西園翔太

【美術部】
●第40回全国高等学校総合文化祭（広島大会）　美術・工芸部門鹿児島県代表　徳永　葵（3年）

【吹奏楽部】
●第61回九州吹奏楽コンクール　銀賞

【バドミントン部】
●第61回鹿児島県春季バドミントン選手権大会　女子団体　ベスト8　男子シングルス　ベスト16　小田裕典、ベスト16
●第51回鹿児島県高等学校バドミントン競技大会　女子団体　ベスト8　男子シングルス　小田裕典　ベスト16
●第30回鹿児島県ジュニアバドミントン大会　男子ダブルス　ベスト16　小田裕典・西田智貴
女子ダブルス　ベスト8　井上綾乃・有川花音　ベスト16　谷山絢音・赤塚美咲

【野球部】
●第138回九州地区高等学校野球大会鹿児島県予選大会　ベスト16
●第98回全国高等学校野球選手権鹿児島大会　ベスト16

【ソフトテニス部】
●第69回鹿児島県高等学校ソフトテニス競技大会　男子団体　ベスト8　男子ダブルス　小谷・脇田ペア　ベスト16
●県高校学年別ソフトテニス選手権大会　2年　第2位　小谷皆太・松元了一
●鹿児島市高校ソフトテニス競技大会　男子　団体　3位　男子　個人　3位　黒瀬一貴・野村回

【弓道部】
●平成28年度　鹿児島市高等学校春季弓道競技大会　女子団体　第3位　女子個人　優勝　二石詩織
●第62回鹿児島県高等学校弓道競技大会　男子個人　第4位　竹園響大朗　女子団体　第9位
●平成28年度鹿児島市高等学校新人弓道競技大会　男子団体　第2位　男子個人　2年生の部　第1位　恒松　祐輔　1年生の部　第1位　日高竜司郎　女子個人　2年生の部　第3位　宮内さくら
●平成28年度鹿児島市内高等学校弓道競技大会　男子団体　第2位　女子個人　第4位
●全九州バレーボール総合選手権大会県予選　男子　ベスト16
●第69回鹿児島県高等学校バレーボール競技大会　女子　ベスト16
男子　ベスト16
●第61回鹿児島県春季バドミントン選手権大会　女子団体　ベスト8　男子シングルス　小田裕典　ベスト16
●第51回鹿児島県高等学校バドミントン競技大会　女子団体　ベスト8　男子シングルス　小田裕典　ベスト16
●第30回鹿児島県ジュニアバドミントン大会　男子ダブルス　ベスト16　小田裕典・西田智貴
女子個人形　第7位　新村　胡実
女子個人組手　ベスト16　坂元　渚、友岡　梓、今村　紗雪
●平成28年度鹿児島市高等学校空手道競技大会　第2位　女子団体組手　第1位　甲南高等学校A
女子団体形　第1位　甲南高等学校A
第2位　甲南高等学校B
女子個人組手　第2位　今村　紗雪
第3位　友岡　梓
女子個人形　第1位　新村　胡実
第2位　今村　紗雪
第3位　福吉安寿実

【ESS】
●平成28年度鹿児島県高校生英語ディベート春季大会及び九州地区代表選考会　第1位　甲南高校Aチーム（吉留　梨央、櫛山　彩音、加治屋　里奈、中村　彩夏、山下紗里奈、森山　寛生）
●第36回　高校生英語弁論大会鹿児島県代表選考会　最優秀賞　吉留　梨央
●第19回鹿児島地区高等学校揮毫大会　女子　ベスト8

【書道部】
創作部門　高文連賞　原口知佳（3年）、西春菜（3年）　優秀賞　石原美麗（2年）、東美里（3年）、東瀬戸日菜子（3年）
臨書部門　高文連賞　原野千香子（2年）・福満香紅（2年）・森美菜（3年）　優秀賞　東那々子（2年）
●第21回全日本高校・大学生書道展　原口知佳
書道展賞　東瀬戸日菜子・中馬百香・宮下紗奈・西春菜・原野千香子・永山瑞季　優秀賞　堀切奈々・森美菜・古井志歩
団体賞　第10位
●第53回南日本硬筆展　南日本新聞社賞　原野千香子

【陸上競技部】
●第69回鹿児島県高校総体陸上競技大会　男子100m　1位　折田　歩夢
男子200m　1位　折田　歩夢
男子4×100mR　1位　竹之下卓也　折田歩夢　北村遙大　奥柊大
男子4×400mR　2位　北村遙大　奥柊大　折田歩夢　竹之下卓也
男子トラック総合　3位　鮫島　媛乃
女子100m　5位　鮫島　媛乃
女子100m　6位　塗木ひかる
女子200m　4位　鮫島　媛乃
女子100mH4位　園田キララ
女子5000mW4位　山口佳那子
女子4×100mR　6位　塗木ひかる　鮫島媛乃　谷口智海　園田キララ
女子走幅跳　3位　原田里加
●第71回鹿児島県陸上競技選手権大会　男子400m　47秒59（大会新）　第1位　折田　歩夢
女子100m　第1位　折田　歩夢
女子ジュニア400m　第5位　森川　夏美
男子ジュニア100m　11秒16　第3位　竹之下卓也
男子4×100mR　41秒84　第5位
女子100mハードル　出場
女子200m平泳ぎ　2分55秒44
女子100mバタフライ　出場
吉嶺みやま　1分09秒97
女子200mバタフライ　出場
吉嶺みやま　2分35秒73
女子200m個人メドレー　出場
脇本詩子　2分29秒43
女子400m個人メドレー　8位
脇本詩子　5分21秒84
女子200m個人メドレー　出場
浦田果穂　2分34秒40
女子400m個人メドレー　出場
浦田果穂　5分32秒33
女子400mメドレーリレー出場
脇本詩子・長尾海香・吉嶺みやま・浦田果穂　4分45秒77
女子400mリレー　出場
脇本詩子・長尾海香・浦田果穂・吉嶺みやま　4分22秒02
●【鹿児島県高等学校新人水泳競技大会】　8月30日㈫　国分総合プール
男子400mメドレーリレー　3位　白濵隆幸・川嵜直人・別府大地・原口大空
女子200m個人メドレー　2分27秒32
女子400m個人メドレー　1位　脇本詩子　4分58秒94
女子200m個人メドレー　3位　浦田果穂　2分33秒22
女子400m個人メドレー　2位　浦田果穂　5分22秒19
●【鹿児島市高等学校水泳競技大会】　9月22日㈭　鴨池公園プール
男子200mメドレーリレー3位　白濵隆幸・川嵜直人・別府大地・原口大空　1分56秒74　3位
女子400m自由形　脇本詩子　5分04秒74　3位
女子200m自由形　脇本詩子　2分26秒67　3位
女子50mバタフライ　浦田果穂　31秒66　3位
●【平成28年度第78回末弘杯全九州高等学校選手権新人水泳競技大会】　10月1日㈯～2日㈰　福岡市西区市民プール
男子200m自由形　田中盛太郎　2分09秒42
男子400m自由形　田中盛太郎　4分42秒68
男子100m平泳ぎ　川嵜直人　出場
男子200m平泳ぎ　川嵜直人　1分11秒57
男子200m自由形　川嵜直人　2分36秒00
男子100m自由形　原口大空　出場
男子50m平泳ぎ　原口大空　33秒30
男子100m背泳ぎ　白濵隆幸　出場
女子50m平泳ぎ　浦田果穂　58秒99
女子200m背泳ぎ　白濵隆幸　1分04秒72
男子200m背泳ぎ　白濵隆幸　2分21秒11
男子200mバタフライ　出場
別府大地　2分31秒11
男子400mメドレーリレー　出場
白濵隆幸・川嵜直人・別府大地・原口大空　4分18秒05
男子400mリレー　出場
原口大空・別府大地・田中盛太郎・白濵隆幸　3分54秒00
女子200m個人メドレー　出場
浦田果穂　2分39秒43
女子400m個人メドレー　出場
浦田果穂　5分29秒92　7位
女子200m個人メドレー　2分28秒97
女子400m個人メドレー　5位
脇本詩子　5分09秒80
白濵隆幸・早崎翔紀・別府大地・原口大空　4分14秒21
女子100m平泳ぎ　出場
長尾海香　1分20秒79
女子200m平泳ぎ　出場
長尾海香　2分55秒44
女子100mバタフライ　出場
吉嶺みやま　1分09秒97
女子200mバタフライ　出場
吉嶺みやま　2分35秒73
女子200m個人メドレー　出場
脇本詩子　2分29秒43
女子400m個人メドレー　8位
脇本詩子　5分21秒84
女子200m個人メドレー　出場
浦田果穂　2分34秒40
女子400m個人メドレー　出場
浦田果穂　5分32秒33
女子400mメドレーリレー出場
脇本詩子・長尾海香・吉嶺みやま・浦田果穂　4分45秒77
女子400mリレー　出場
脇本詩子・長尾海香・浦田果穂・吉嶺みやま　4分22秒02
●【鹿児島県高等学校新人水泳競技大会】　8月30日㈫　国分総合プール
男子400mメドレーリレー　3位　白濵隆幸・川嵜直人・別府大地・原口大空
女子200m個人メドレー　2分27秒32
女子400m個人メドレー　1位　脇本詩子　4分58秒94
女子200m個人メドレー　3位　浦田果穂　2分33秒22
女子400m個人メドレー　2位　浦田果穂　5分22秒19
●【鹿児島県高等学校新人水泳競技大会】　8月30日㈫　国分総合プール
男子400mメドレーリレー　3位　白濵隆幸・川嵜直人・別府大地・原口大空
女子200m個人メドレー　2分29秒59
女子400m個人メドレー　1位　脇本詩子　5分04秒66
女子200m個人メドレー　出場
浦田果穂　2分34秒40
女子400m個人メドレー　出場
浦田果穂　5分32秒33
女子400mメドレーリレー出場
脇本詩子・長尾海香・吉嶺みやま・浦田果穂　4分45秒77
女子400mリレー　出場
脇本詩子・長尾海香・浦田果穂・吉嶺みやま　4分22秒02
●【鹿児島県高等学校新人水泳競技大会】　8月30日㈫　国分総合プール
男子400mメドレーリレー　3位　白濵隆幸・川嵜直人・別府大地・原口大空
女子200m個人メドレー　2分29秒59
女子400m個人メドレー　8位
脇本詩子　5分21秒84

甲南高校のあゆみ

甲南高校は今年創立一一〇周年を迎えた。長い歴史を持つ、伝統ある学校である。ただ、私たちは自分たちの学校「甲南高校」についてどれだけ知っているだろうか。この機会に調べてみた。

二中・二高女から甲南へ

甲南高校は、二つの学校が統合されてできた学校だ。一八八四年設立の中学造士館の流れを汲むとされる鹿児島県立第二鹿児島中学校（通称：二中）と、鹿児島県立第二高等女学校（通称：二高女）の二校が、一九四八年の学制改革によってそれぞれが鹿児島県鹿児島高等学校の第四部と第二部になったのち、一九四九年に統合されて鹿児島県甲南高等学校として発足、開校。一九五五年には鹿児島県立甲南高等学校と改称して現在に至る。甲南高校の始まりは共学ではなかったということが驚きだった。

校訓

校名の由来

「甲南」という校名は、甲•突川の南に、大久保甲•東（大久保利通）の生誕地と西郷南州（西郷隆盛）の住居地跡があり、両先人の名に通ずることからつけられた。甲の文字は「きのえ」といわれるように、十干の最初の文字で「第一位」という意味もある。他にも校名の候補として「荒田」「慶城」があったそうだ。

甲南高校訓

甲南高校の校訓は「剛・明・直」と「気高く・優しく・健やかに」である。これはそれぞれ旧制二中と旧制二高女の校訓をそのまま受け継いでいる。

「剛・明・直」のもとは、一九三〇年、当時の校長先生の提唱した「剛く明るく真直に」という言葉を受けている。また「気高く・優しく・健やかに」は、一九二八年に決定された二高女校訓の「気高く・優しく」に「健やかに」が付け加えられてできた。この一一〇周年という新しい歴史を刻む年に、もう一度校訓を見直し、自らを成長させていく鍵としたい。

校舎の歴史

今年の夏、甲南高校大規模改修工事が完了し、新しく甲南高校が生まれ変わった。今までの校舎の面影を残す木目を基調とした、新しいけれど少し懐かしい雰囲気のある美しい校舎である。新しい校舎の完成を楽しみにしていた人も多いのではないだろうか。

甲南高校の歴史は長い。その分、校舎も時代ごとに大きく変化してきた。その変遷をアルバムを参考に調べてみた。まずは一〇〇周年のアルバムを見てみると、二甲記念館はまだ存在せず、その場所が駐車場として使用されていた。二甲記念館は、甲南高校創立一〇〇周年の記念事業として平成十九年に建てられた。学年朝礼や、講演を行う際に活用されている二甲記念館も、その歴史は意外と新しかった。これから甲南高校の成長と共にその歴史を刻んでいくことだろう。その他に、調べていく中で衝撃を受けたのは、クーラーである。なんと全教室にクーラーが設置されたのは平成二十年だった。それまでは桜島の降灰の影響で、暑い夏でも窓を開けることができなかったらしい。想像しただけでも汗が流れる。今の快適な環境で学べることを感謝したいと思った。

甲南高校は、これまでの長い歴史の中で、先輩方から現在の甲南生である私たちに受け継がれてきたものがたくさんあるが、この学習しやすい環境もその一つだ。私たちが気持ちよく高校生活を送ることができるのは、今まで大切に甲南高校の校舎を使っていただいた先輩方のおかげであると思う。私たちはこれまでの甲南高校のあゆみを知り後輩へと受け継ぐ義務がある。

甲鶴戦の歴史

甲鶴戦

毎年4月に実施されている甲鶴戦とは、鶴丸高校と甲南高校とのスポーツ交流戦のことで、第9回大会で正式名称が「甲南・鶴丸スポーツ交歓会」と定められた。その際に「何もかも鶴丸から先でなくてもいいではないか、カッコウ戦はカッコウ悪い」という意見があり、甲南・鶴丸スポーツ交歓会（甲鶴戦）となったというエピソードがある。「交歓会」なので、互いにうちとけて楽しみ、喜びを交わすことを目指している。特に最初の頃は両校の親睦を図ることにこだわり、勝敗にはこだわっていなかったという。

スポーツの交歓を通して両校の親睦を図り、両校それぞれの生徒の自覚と連帯感を高めることを目的として、昭和46年に第一回大会が開催されたが、実は旧制中学校時代にも、一中・二中の間で柔道などの定期戦は行われていた。第一回大会はサッカー、男女バスケットボール、男女バレーボールの3競技、5種目が行われた。（下記表を参照）

通算成績

今年も4月に第46回大会が行われた。これまでの通算成績は、鶴丸高校20勝、甲南高校16勝だ。また、第5回、第12回、第13回、第22回、第23回、第40回の6大会では、勝ち数が両校同じで、両校優勝となっている。最初の頃の記録が一部または全く分かっていないため、勝敗は分からない大会もある。

両校優勝を除く3連覇以上の記録は、鶴丸が第32回で4連覇、第37回～第39回で3連覇しており、第42回～現在まで甲南が5連覇中である。

両校優勝を含める連覇記録は、5連覇が最長で、第37回～第41回に鶴丸が、第42回～現在まで甲南が記録している。

甲鶴戦の始まり

甲鶴戦の始まりについては、いくつかのエピソードが残っている。当時の生徒会長たちが中心となって話を進めていた。甲南の生徒会長が「甲南にもっと元気と誇りを取り戻すために一中、二中戦を復活させよう。」と提案し、当時の執行部全員で鶴丸に提案しに行ったそうだ。その生徒会長の任期中には実現には至らなかったが、次期の生徒会長は甲鶴戦の実現を公約にかかげ、見事当選、任期中に第1回が開催された。中心となって話を進めた両校の生徒会長はそれぞれ中学時代の同級生だったそうだ。伝統ある行事を創りあげた二人は、もしかしたら中学時代から画策していたのかもしれない。

回	導入種目名	競技数	種目数
1	サッカー　男女バスケットボール 男女バレーボール	3	5
3	野球	4	6
12	ラグビー	5	7
20	陸上競技　硬式テニス 軟式テニス　柔道　剣道	10	12
21	男子ハンドボール	11	13
22	弓道	12	14
25	卓球	13	15
30	バドミントン　空手道	15	17
32	女子ハンドボール	15	18
38	水泳	16	19

甲南高校一周の旅

今年で一一〇周年を迎えた歴史ある甲南高校。歴史が長い分、普段目にするけれど私たち甲南生にあまり知られていない古い置物やモニュメントがたくさんある。そこで、私たちが皆さんを甲南高校一周の旅に連れて行き、様々な甲南の「宝」を紹介しようと思う。

①まず旅のはじめとして紹介するものは、南門のそばにたたずむ石碑。隣にはガス灯風の照明もある。この石碑には中原猶介翁宅址碑という文字が刻まれている。中原猶介翁という人物は、幼少より蘭学や舎密学（せいみがく）に熱中し、十八歳にして藩命により長崎へ出向く機会を得、オランダ人から蘭学を習得した。二十二歳で島津斉彬に見出され、集成館事業や薩摩藩水軍増兵、軍艦建造、反射炉建設の職にあたり、近代海軍の礎を築いた。また、薩英戦争に備えて日本初の機械水雷を開発し、さらに斉彬の命により薩摩切子の着色を研究し、紅色薩摩切子の製作に成功するなど、鹿児島県や日本の近代技術の面で大きな功績を残した。（参照：Wikipedia）そのような偉人の石碑がなぜ甲南高校にあるのか。実は以前、甲南高校の敷地に家を持っていたということが調べてみると分かった。しかし、その土地が県に寄贈され、現在の甲南高校が建つことになったようだ。次に、「ガス灯」を紹介しよう。そもそも、ガス灯がある学校などあるだろうか。甲南高校を練り歩くと、いたるところで同じような西洋風の灯りを目にする。この灯りは、甲南高校第五十六期生が卒業記念として寄贈したものだということだ。冬になると、暗い中、部活動に励む生徒たちを暖かく見守ってくれているような気がする。

中原猶介翁宅碑

飛翔

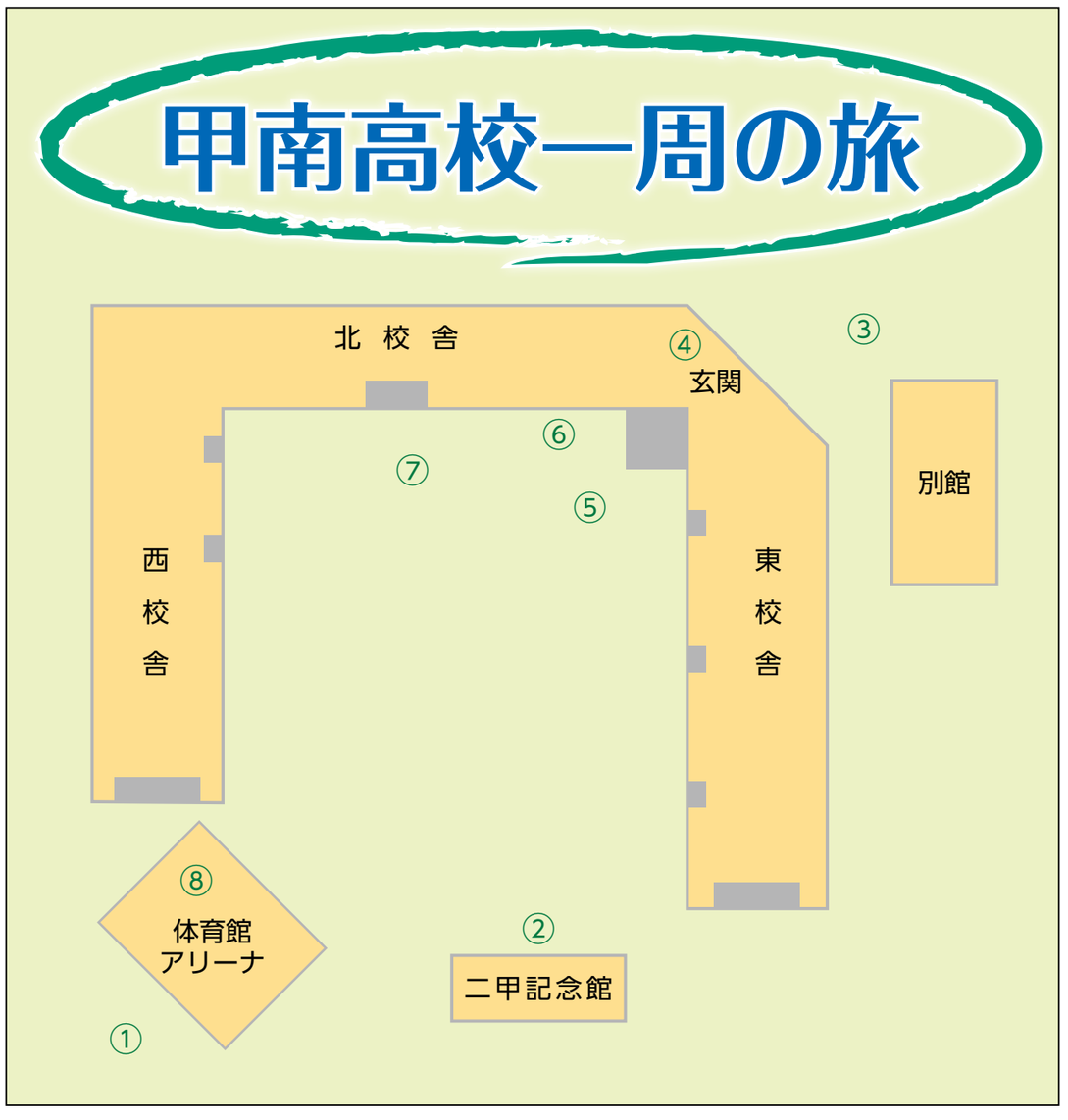
②さて、南門から離れ、二甲記念館前にたどり着くと「飛翔」と書かれたモニュメントが置かれている。これは甲南高校が設立されて一〇〇年という記念の年に二甲記念館と共に創られたものだ。このモニュメントは鹿児島県出身で東京藝術大学及び同大学院修了の竹道久さんが手がけた。竹さんは、南日本美術展でパリ賞を受賞し、フランス留学をした芸術家である。「飛翔」という言葉には、空高く飛びあがるという意味がある。その言葉通り、甲南高校がますます発展することを願って創って下さったのではないだろうか。

③次に、二甲記念館から正門へ向かうと、正門前に赤崎勇さんの石碑が置かれている。赤崎さんは、鹿児島二中（現在の甲南高校）出身で、皆さんもご存じの通りノーベル物理学賞を受賞された。除幕式にはご本人が実際に出席された。石碑には顔のレリーフも彫られており、非常に温和で優しそうにみえる。赤崎さんは、二中四年生の時に終戦を迎え、父親から「これからは好きなことをやれるし、行きたければどこにでも行ける」と言われたことをきっかけに好きなことをやり通すことにしたそうだ。この甲南高校は、赤崎さんが好きなことをやり通す原点の場所ともいえる。そして、二〇世紀中には実現不可能だといわれていた、青色発光ダイオード（LED）を開発し、照明や液晶テレビ、携帯電話など、私たちに恩恵をもたらしてくださった。赤崎さんは、私たち甲南生の誇りであり目標だ。

赤崎勇さん記念碑

④正門を過ぎ、正面玄関の前にくると、「登録有形文化財」と書かれたプレートが置かれている。なんと甲南高校の本館は、文化財に指定されているのだ。登録有形文化財は、「建設後五〇年を経過している」もので、かつ「国工の歴史的景観に寄与している」「造形の規範となっている」「再現することが容易ではない」の三つの条件のうち、いずれかに当てはまるものということが登録の条件である。私たちの学舎である甲南高校は、本当に歴史ある学校だと実感する。

正面玄関を抜けると、すぐにグランド（校庭）が目の前に広がる。甲南高校のグランドは、校舎に囲まれる形で広がっている。これも甲南高校特有なのではないだろうか。



正面玄関

登録有形文化財

⑤グランドで熱心に練習をする部活動生の間をすり抜けると、ハンドボールコート前に像が見えてきた。「追思之碑」である。この「追思之碑」は、昭和十六年、二中創立四十四回記念で建てられたものだ。大きく壮大なたたずまえは、どんな災害にも崩れそうにない。以前は「忠魂碑」という名であったが、後に「追思之碑」という名に変わったという。上に立つ像は中村晋也さんがデザインし、甲南高校グランドのシンボルとなっている。

⑥「追思之碑」のすぐ右に目を向けると、和を感じさせる池があった。よく見ると四十六期生の卒業記念と書かれている。甲南高校にある様々なものが卒業生からの寄贈品である。改めて先輩方に支えられて甲南高校が存在しているのだと感じる。池の側には、気になる小屋らしきものを見つけた。これは、水道管の蛇口を雨や灰など、あらゆるものから守るための小屋らしい。かわいらしい骨のマークがあるので、以前は犬小屋だったのではないだろうか。注意しなければ見つけられないほどひっそりと佇んでいる。このような発見もこの旅の魅力の一つだ。第四十一回の卒業メンバーの会だという。太平洋戦争勃発の翌年に入学し、激動の時代を過ごされた先輩たちの大切な碑だそうだ。

追思之碑

犬小屋?!

⑦そのまま北校舎に沿って歩いていくと、また気になる「碑」を見つけた。「よどい会碑」であった。「よどい会」とは、二中あがると新たな絵を見つけた。そびえ立つ雄大な桜島と海、そしてその下に街が描かれた作品である。明瞭なテーマと明るいタッチは開放感を演出し、まさに先ほどの絵と正反対の印象を抱いた。桜島の上にわきあがる雲は、体育館に飾るにはぴったりの力強さを感じる。この二枚の絵は、それぞれ田中充さん、西薗和生さんという方が描かれたようだがこの二人が誰で、いつどういう経緯で描いたのかはとうとう分からなかった。しかし、相当昔から飾られており、甲南の体育館を色どっていることはまちがいない。階段をのぼりきると、運動部員の大きな掛け声や、はねるボールの音、シューズの音が聞こえてきた。放課後の活気あふれるアリーナの様子を前にこの旅を終えた。

よどい会碑

⑧さあ、旅もいよいよ終盤。グランドをずんずん進み、体育館正面玄関にたどり着いた。甲南高校の体育館は一階に武道場、剣道場、屋内プールがあり、三階にアリーナがある。充実した施設が揃っており、充実した活動を送ることができるようになっている。正面玄関を抜けると、女性の裸体像を発見した。作者に木佐貫熙と記されていた。調べてみると、どうやら彫刻家として活躍されているようだ。その広さも相まって、ロビーには荘厳な雰囲気が流れている。左に曲がって階段をのぼると、最初の踊り場に興味深い絵があった。中央にピエロ、下部にそれを操る人、上部にはピエロを観覧する人が描かれている。踊らされるピエロのまわりだけ明るく、その周りを寒々として青が包んでいる。この構図は人生の、社会の心理を表しているのでは、と考えることは邪推だろうか。とにかく不思議な魅力ある絵である。さらに階段をもじっと目を懲らすと、様々な趣を感じることができる。今回の「甲南高校一周の旅」を通して、今まで以上にこの学校に愛着を感じるようになった。皆さんも是非、甲南高校を旅してみてはいかがだろうか。

女性裸体像

サーカス：体育館の絵

桜島：体育館の絵

鹿児島が好きすぎる!!
～思いでつなぐ明日への一歩～

平成二十八年第二回の甲南塾では、俳優でありプロデューサー、そして鹿児島弁指導者でもいらっしゃる西田聖志郎さんによる「映画により鹿児島の魅力を世界に発信～『才能』より『思い』～」という演題で講演が実施された。

講演の冒頭で西田さんは、俳優になるという夢を持つきっかけとなった自身の幼少期の経験から生まれた「自分は俳優になれる」という思い込みについて説明された。才能があるかどうかではなく、できるようになるまで夢を追うという強い思いを持つことの大切さ、そしてその努力の中で自分の中に創り出されるものが「才能」となっていくという熱い思いを伝えていただいた。また、甲南高校で得たかけがえのない友人達についてや、日本大学芸術学部での、しのぎの削り合いや夢を実現するための道のりを、著名な人々の残した言葉などを交えながら高校生にもわかりやすく話された。さらに、現在の仕事の一つである「方言指導」に携わるようになるとは当初全く考えてもいなかったことも話された。今夢がはっきり決まっていない人にも「何が夢につながるかわからない、目の前にある課題に懸命に努力して取り組んでいるうちに夢が見えてくる」と励ましの言葉をいただいた。

また鹿児島弁の特徴や発音の実践を演劇部やKBCの部員達を中心に実演を交えながらわかりやすく教えていただき、日頃聞いたり話したりしている鹿児島弁の特徴を楽しく発見しながら学んだ。その指導の中でも鹿児島ならない時期になったと思っています。鹿児島弁の指導者は鹿児島人でなければなりませんから。

Q. 映画『六月灯の三姉妹』を海外展開するきっかけは何だったのですか。

A. もともと海外の映画祭に出品してみたいという思いはあったのですが、たまたま友人がイタリアの映画祭関係者と繋がっていたのです。そこでその方を紹介してもらいDVDを送り観て頂いたところ招待作品に選ばれました。「日本の家族」をテーマとしたこの映画がイタリアの観客に受け入れてもらえるかどうか一抹の不安もありました。しかし、日本の観客と同じ場面で反応を示していただき、「家族」というテーマは世界共通であるということを肌で感じることができました。それを機にオーストラリア、ハワイの映画祭からも招待を受けDVDを送り観て頂いたところ招待作品に選ばれました。「日本の家族」をテーマとしたこの映画がイタリアの観客に受け入れてもらえるかどうか一抹の不安もありました。しかし、日本の観客と同じ場面で反応を示していただき、「家族」というテーマは世界共通であるということを肌で感じることができました。それを機にオーストラリア、ハワイの映画祭からも招待を受け出品参加してきました。

Q. 世界規模で活躍している西田さんから『世界規模でものを考え行動するリーダーを目標とする甲南高校生』へアドバイスをください！

A. 海外に行けるチャンスがあるのなら、ぜひチャレンジしてください！実際に行ってみないとわからないことがたくさんあります。外国に行き現地の人と直接接することにより距離を縮め、相手の立場になって物事を考えることで、お互いの良さに気づけるはずです。そして、世界にどんどん飛び出して「鹿児島人」としての情熱を世界に生かしてほしいです。

～まとめ～

今回の西田さんによる第二回甲南塾の講演とインタビューは、文武両道に励み進路決定をしていく私たちにとって心に響くものでした。「経験は最高の師」とおっしゃった西田さんは、私たちに努力の大切さとチャレンジ精神の重要さを教えてくださいました。現代社会を生き抜いていく私たち甲南高校生には、「学び台湾」や「学びにUK」など、自ら追い求めて努力すれば挑戦できる機会が用意されています。

失敗するかもしれないけれど、成功するかもしれない。そのためのチャンスは私たちの目の前にある！たとえ失敗したとしてもそこから自分の中に何かを追い求めていくその「思い」と行動が今から世界規模の視野を持って生きていく甲南高校生に最も必要となっていくものだろうと感じました。

「鹿児島が好きすぎる」西田さんの熱い思いが、私たちの胸も熱く奮いたたせてくれました。

我が校の誇る名物生徒　Vol・13
前田　泰孝　君

今回は昨年度・今年度と、文化祭のヨーヨーパフォーマンスで話題となり、二〇一六年三月に行われた「２０１６ジャパンヨーヨーリーグ九州地区大会」において六位に入賞した実績を持つヨーヨーパフォーマーの二年四組・前田泰孝君にスポットを当てていきます。

まず、ヨーヨーとは古代ギリシャにおいて、紀元前五百年には似たような遊具があったとされているほど歴史のあるものです。日本には江戸時代に中国から伝来し、戦後は、コカ・コーラの販促品による第一次ブーム、スケバン刑事による第二次ブーム、ハイパーヨーヨーによる第三次ブームがあります。幾度となくブームを起こしたヨーヨーは、誰でも一度は遊んだことがあるのではないでしょうか。そんなヨーヨーを操るパフォーマー前田君にインタビューしました。

Q. いつからヨーヨーを始めたのですか。また、どうして今まで続けようと思ったのですか。

A. 十一歳からです。ハイパーヨーヨーが流行っていたので始めました。その頃行われたハイパーヨーヨーのイベントに参加した時は、参加者は五十人くらいいました。一年後、約二十人のうち三位になり、次の日に行われたイベント参加者は五十人くらいいました。一年後、約二十人のうち三位になり、次の日に行われたイベント参加者は変わらない、はつらつとした情熱を持って、日々生徒に接している。それは自らの教育者としてのスキルを上げるために県外に出ることを希望されているだろう。「鹿児島は個の力が強いと思います。推測ですが、これは造士館（藩校）の流れからだと思います。広島は組織力が強い。たぶん原爆投下が影響していると思います。復興するためには人々が協力して時代を生き抜いてくるしかなかった。こういう違いがとても興味深いです。」

～甲南生へメッセージ～

これからの人生、つらいこと悲しいこと楽しいこと等たくさんあると思います。しかし、自分がやりたくないと思うことにこそ、新たな発見や学びが隠されています。やれと言われてからやる、ではだめなのです。自分の中で理由付けをして積極的に動いた方が確実に自分のためになります。これからの時代は、もっともっと生活にコンピュータ技術が進出し、二十年後にはたいていの仕事を「人」がしなくてもまかなえるという時代になるとも言われています。そんな時代を生きている君たちだからこそ、広い視野を持てるように日頃から意識してほしい。なぜ今、勉強しなければならないのか。なぜ今、自分が行動しなければいけないのか。一つ一つのことには必ず意味があります。それをくみ取って、社会というシステムの一部ではなく、そのシステム全体を俯瞰して自分が何をすべきなのか判断できるような人間になってほしいです。そのためにも今自分ができること、すべきことに全力で取り組んでください。

文化祭での時本先生（一番手前）

今回の取材でおっしゃっていたことは、先生の生き方からひしひしと伝わってきた。広い視野を持ち時代を読む力を私たちも意識して生きていきたい。

鹿目兎耳 232
時本　直　先生の巻（数学科）

※タイトルの由来
トビのようによく見える目とウサギのようによく聞こえる耳のこと（ちなみに訓みは「えんもくとじ」）。新聞の探訪記者などにいう。飛耳張目という言葉もある。皆さんがこの記事をきっかけに、自らの見聞を広げてくれれば幸いです。

平成二十七年度から広島県との交流事業として本校に赴任されている数学科の時本直先生。「広島と鹿児島の教育の違いを学ぼう！」と決意し、鹿児島赴任を希望。明快な授業と、トランペットの名手として生徒たちからの人気が高い、時本先生にお話を伺った。

～進路探求～

両親の影響で幼少時よりピアノ・エレクトーンを習い、中学時代は吹奏楽部に所属し、全国大会に出場。高校時代にはマーチングバンドで全国を目指し、それを実現している。そのような忙しい生活で勉強はと尋ねると「苦手教科も得意教科もなかった」とのこと。大学進学に際しては音楽の教員になるために音楽を志望したものの断念し、広島大学に入学。数学科の時本直先生。「広島と鹿児島の教育の違いを学ぼう！」と決意し、鹿児島赴任を希望。明快な授業と、トランペットの名手として生徒たちからの人気が高い、時本先生にお話を伺った。

～進路探求～

両親の影響で幼少時よりピアノ・エレクトーンを習い、中学時代は吹奏楽部に所属し、全国大会に出場。高校時代にはマーチングバンドで全国を目指し、それを実現している。そのような忙しい生活で勉強はと尋ねると「苦手教科も得意教科もなかった」とのこと。